

千葉県四街道市鹿放ヶ丘開拓 「生命乃開花」

千葉県の戦後開拓地は、旧軍用地が多かった。千葉市、四街道市、佐倉市にまたがる広大な「下志津原」は旧陸軍の演習地だった。1945（昭和20）年の終戦直後、戦災者や復員兵が入植し、下志津原開拓団が結成された。その中心部（四街道市）に、茨城県内原町（現・水戸市）にあった「満蒙開拓青少年義勇軍訓練所基幹学校」の生徒約170人が入植した。

翌年、開拓団から独立した。47年に地区名を、江戸時代に鹿狩りが行われていたことにちなみ、鹿放ヶ丘（ろっぽうがおか）と命名。48年には鹿放ヶ丘農苑開拓農協を設立した。

同開拓地は荒野で農業用地として適していなかった。一見、平坦に見えても長雨や強風などの自然災害が多く、初期の開拓は困難を極めた。災害克服のため、共同作業でかんがい施設や防風林などを設けた。51年には住宅を建設し、同訓練所の延長のようだった共同経営から個人経営に移り始めた。強い団結力で共同作業を継続し、経営の確立をめざした。

その後、開拓農協は総合農協と合併。現在、都市近郊（千葉市から北へ約7^{km}）の同開拓地では、後継者が酪農、養鶏などの畜産、落花生、野菜中心の畑作を営んでいる。

開拓記念碑は、70年の鹿放ヶ丘開拓25周年記念行事で、業績を後世に伝えるものとして建立された。碑文は「生命乃開花」と25年の歩みの説明書き。裏面には、組合員及び賛同者の氏名が刻まれている。



生命乃開花

我等は当時の国策に添い満州開拓の志をたてて、茨城県内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所に入所し、所長加藤完治先生の薫陶をうけたが、昭和二十年八月十五日大東亜戦争の終結を機に内地開拓に転換し、軍用地下志津原の一画二百六十余ヘクタールの荒野に入植した。内原以来の指導者高井篤先生を中心に、当時十五才から十八才の青少年が主体となり、外に引揚外地開拓者及び縁故者が加わった。

発足時は全共同経営で軍用牽引車、馬を駆使して開墾営農を進めると共に乳牛豚鶏を導入し、畜舎仮宿舎庫を建て農産加工製造販売等に至るまで、漸く事業の進捗を見た。さりながら混沌とした世情と極度に物資の欠乏している際の開拓事業は誠に困難を極め、一致団結困苦欠乏に堪え抜く努力と、先覚者関係当局地元の指導助力と相俟って、当初の難関を克服し成功への曙光をみることが出来たのである。昭和二十六年には住宅を建設し、逐次個人経営に移り、組合を中心に機械の導入畜産園芸の拡充等を企画実施し、また、畑地灌漑の施設、大型機械による営農形態の確立等農業近代化に努める一方、部落に神社墓地グラウンド及び青年会館を設置した。

昭和四十年に開拓の実績が認められ朝日農業賞の表彰を受けて以来、組合員の生活の安定向上と組合事業の高度成長によって経営の基礎が確立したので、昭和四十四年に、懸案の組合事務所農業倉庫生活センター等を現地中央に新築移転して、開拓事業の目的をほぼ達成することができた。今後、我等は発展の途を極めようとするものである。

ここに開拓二十五周年を迎えるに当たり記念碑を建て組合員、賛同者の名を刻み業績を校正に伝えるものである。

昭和四十五年十一月十日

篆 額 高 井 篤
撰 文 安 達 増 三
加倉井 翠 園 書之